

④ これからの動物園を思う

■石原敏明

1 人間は、生命の脇役

太陽を取り巻く惑星のなかでも、漆黒のキヤンパスに碧く浮かんでいる地球は、他の星よりも際だって美しい。あらゆる生命の環が創りあげた奇跡の絵画、壮大な生命のモザイクである。しかし、この創造劇に人間は全く寄与してはいない。それどころか、作品の生命を削いできた、といっても過言ではない。

氷河期などによる生命の存亡期を乗り切ってきた自然の回復力は、まさに闖入者である人間の破壊力によっておおしく蝕まれ、特に経済最優先であった二〇世紀は未曾有の加速で地球を蚕食し、天候さえ大きく変えようとしている。

こんなはずではなかった、地球は認識されるために存在するのではない、しかも、他の生き物のように感知するのではなく、地球環境の危機を認識できるのは汚染の当事者、人間だけであることを創造主は、どう説明されるのだろうか？人間と地球、少なくとも自然は今や対立の構図となっており、人間なかりせば、さぞや地球は美しかったろう。

広大な熱帯雨林を焼き払うには数カ月も要らないが、そこに生息する豊かな生物を元どおりに回復するためには、六百年の歳月を要

するという。

人間は地球に生息する生物のほんの一部に過ぎない。しかも科学する唯一の生物であり、破壊者の贖罪として自然科学の知恵からスタートして自然環境の回復に努めなければならぬ。何故なら、人間もこのままでは存在が覚束ないからだ。

そんなことは、分かっている、と誰もが言うだろう。それなら何をしたら良いのだろうか？動き出すきっかけもつかめてはいないのだ。動物園がそのきっかけとならないだろうか？茶の間の映像ではなく、実物に触れて感じることに、柔らかな毛並みを、バーチャルではないリアリティーをアナログな感覚を見なおそうと思うのである。そしてそのお手本になる動物園はどんなものになるだろうか？空想のそれでは無く、実際に行動している動物園、アメリカンズでの体験をもとにこれからの動物園を紡ぎあげてみたい。

2 ストーリーとスリルに満ちて

両側を腰程度の高さまでのクリアーなガラスに挟まれて、細いウッドデッキが続いている。むっとする高温多湿な空気、命の匂いに満ちている鬱蒼とした熱帯樹林が、左右に連

続した崖に絡みつくように生えている。もうすっかりジャングルの人になっている。繁茂するシダやマングロブの林、更に奥に続くジャングル、それは絵画なのだ。しかし、手前の熱帯植物群と見事に溶けこんでいる。左側の溪谷を覗きこむと、褐色の崖下の狭い泥土の河川敷にバクがのんびりと横たわっている。小さな流れには、なにかが泳いでいる、蛇だ。鳥の声がかまびすしい。抽象彫刻のような枝ぶりのマングロブの林には、絶滅が危ぶまれているテングザルが群れている。下の流れをすばやく横切るものがある。カワウソだ。あつという間に岩陰に消えていった。

デッキを行くと、巨大な板根をもつバンヤンの大木がせせり出している。ツタが絡み付く傍らのジャングルの木の葉の間から鋭い眼が光っている。一瞬、たじろぐ、黒いジャガード。その黒いしなやかな肢体がすぐ傍に迫ってくる。気づかないほど透明なガラスが嵌め込まれていてホッとする。狭い洞窟をくぐろうとすると頭の上に朽ちた木が現れて、そのなかに上腕ほどのかなり太い蛇がとぐろを巻いている。ギョッとすることも無反射ガラスが嵌め込まれている。憎い仕掛けだ。デッキは次第に左右が岩に囲まれて、やがて頭上も大きな岩盤に蔽われる。そして、水音

- 1 人間は、生命の脇役
- 2 ストーリーとスリルに満ちて
- 3 市民が支える快いサービス
- 4 充実した専門的な組織体制
- 5 東へ西へ、環境教育の旗手として
- 6 動物の故郷でも生命を守りながら
- 7 動物園の復活
- 8 理想の動物園を

ジャングルワールド テングザルとマングロブの林



(ニューヨーク野生生物保護公園)

が高まり、洞窟上のテラスに出る。そこは、
渓谷の覗き窓になっていて、左右に小さな滝
が落ちており、霧が漂っている。

こうしたテラスを幾つか覗き、やがて広い
池のような流れの貯まりのなかに、今までで
一番巨大なバンヤンの木がツタを絡ませ王者
のように立っている。飛び交う鳥たちの声、
間断無く聞こえる水の音、圧巻である。やが
て左下の渓谷の透明な流れにインドガビアル
の特徴のある姿がゆらりと揺れている。亀や
さまざまな淡水魚が入り交じって遊泳してい
る。最奥のビューポイントからは、水面も水
中も両方が見える密林の渓谷の覗き窓も用意
されている。

ニューヨークの郊外、ブロンクス動物園、
今の名前は野性生物保護公園のジャングルワ
ールド。構想建設に六年を費やした四千平米
の熱帯雨林の動植物や気候までも再現した世
界最高のインドアバイオパークであり、一九
七〇年代から世界中に伝播したランドスケ
イプイマージョン、臨場感ある展示、生態展示
方式の極致である。ストーリーとスリルに満
ち、動物の生態学と自然科学、景観へのこだ
わりが産み出した本格的なコンセプトであ
る。

そこに入りこんだものは、あたかも探検家
になるばかりか、生物の生息地を強く感じ、
その環境の保護にまで思いを寄せることに
なる。また、動物たちさえも野生を取り戻すこ
ともあるのではないだろうか。そして、生息
環境の再現に徹底的に取り組みながら、決し
て造園的な匂いを微塵も感じさせないそのテ
クニックは、人工的な過剰な装飾感を完全に

払拭しているのであった。

動物園や植物園などのバイオパークのデザ
インは、決して造園学ではなく、自然科学、
生態学などに裏打ちされたランドスケープの
構築そのものであるとおもう。

3 一市民が支える快いサービス

姉妹都市、サンディエゴ市の動物園は全米、
いや世界的に有名であり、まずは動物園へと
いうツアー客にとっては定番のコースになっ
ている。しかし、何よりも動物園のファンは
地元市民であり、サンディエゴ市民の半分
がズーフレンド、つまり友の会の会員である
という。どこかの友の会のように僅かな会費
を払い、活動らしいものも無く名目上の会員
が名簿に並んでいるような形骸化したもので
はなく、資金調達からベビーシッターなど、
あらゆる面で活躍するステージを持っている
総合支援組織なのだから、それは凄いこと
である。

サンディエゴ空港でタクシーに乗り、動物
園へと言うとドライバーが、「俺はズーフレ
ンドだ」と胸を張るといふエピソードは、そ
の道ではかなり知られている。そのとおり、
温暖な気候にも恵まれて動物園の賑わいは入
園者の士気を高めてくれる。しかし、このテ
ンションの高さを保つための陰の努力に注目
しなければならない。

サンディエゴズーは、郊外のワイルドアニ
マルパークとともに動物園協会、日本でい
えば財団による運営を行っているが、黒字で、
配当さえ出している積極的経営を進めてい

る。園内のズーショップ、ジャングルバザ
ーは盛だくさんのオリジナルグッズに溢れて
おり、ティーシャツ、マグカップ、サフアリ
スーツ、縫いぐるみなど専属デザイナーによ
るセンスの良い製品は、それらを買うために
だけ訪れるという多くのファンを呼んでいる
という。数年前にズーラシア事業と動物園、
水族館のためのイベントを開催したときに、
サンディエゴズーと提携してオリジナルマグ
カップを輸入販売したが、高めの価格ながら
売りきれてしまった。私は今でも愛用してい
る。

起伏に富んだ地形での移動と時間の節約を
兼ねた楽しいガイドつきバスは、二階建てで
ステーションも二階建て、一遍に乗りこめる
から回転が良い。ケープルカーのスカイファ
リはいつも満員で乗ればラッキー、これも
稼ぎ手だ。手軽なレストランやバーガーショ
ップは、随所にあるし、サービス施設は充実
している。更に、リピーターを生む仕掛けが
用意されており、例えば、豹や猫の顔を丁寧
に、ユーモラスに化粧してくれるアニマルマ
スクのペインティングは凄人気で、大人も
並ぶほどである。動物のショーもガイダンス
の面白さ、スマートさで人を沸かせている。

さて、コンピューターコントロールにより
毎分三百五十トンの水量豊かな人工とはいつ
ても、熱帯植物が繁茂する虎が息する渓谷
を再現したタイガーリバーは、オープンな
あるいはガラスをとおした数カ所のビューポ
イントから、絵画のようなシーンが展開す
る。出口のゲートには、クロックファミリー
というこの展示場建設に金銭的に貢献した一

タイガーリバー



(サンディエゴ動物園)

ジャングルワールド バンヤンの大木



4 一 充実した専門的な組織体制

家の名前が掲げられている。園路の途中にも何人もの寄付者名が記された木製の碑が目に残った。生息地展示は多大な費用を要するが、市民や企業の寄付によって資金負担を軽減し、かつ一族のメモリーとしてまた、企業の社会貢献によるイメージアップとして一石二鳥の効果を持っている。動物園の年報の巻末には、寄付額に応じたグループ毎の形で、個人、企業、基金、団体などの名前が数ページにわたって記されており、その総額は入園料収入に匹敵するほどである。その寄付金を得るための資金調達活動は、グレードによっては、副大統領やハリウッドスター、著名なニュースキャスターなどを招請する様々なパーティーによるが、多くのボランティアがその設定に協力している。また、園内のガイドやズーショップ、レストランの運営、教育普及活動やベビーシッターに至るまであらゆる面でボランティアが活動している。シアトルのウッドランドパークズを訪問したが、スタッフとボランティアの部屋もデスクも区別がつかないのには驚いた。

信頼と責任、羨ましい思いだった。快適で親切なサービスは、このように市民、企業などの分厚い支援によって支えられ、その活動が貢献した個人や企業、団体への直接的な減税につながるなど、文化を市民の自主性に委ねる理念とそのため社会制度の充実には眼をひらかれるものがあった。私をガイドしてくれた老婦人の、「私は年間で千時間もここでボランティアをしました」という誇り高い声の響きを今も覚えている。

アメリカの公立動物園の運営方式は公営、いわゆる直営と協会管に大別されるが、全体としては協会運営に移行する傾向がある。いずれにしても一長一短があるが、経営状況や活動内容、あるいは実際の賑わいなどの印象からは、協会運営の動物園の方が活発であると考ええる。

そのことは別にして、いずれの組織においても日本と異なる大きな特徴は、キュレーター制度が基本となっていることである。日本でも最近では、美術館などの学芸員をそう呼ぶようなこともあるが、欧米では哺乳類科長とか両生類科長とか動物学の専門研究者として動物園にかかわっており、実際の飼育業務担当とは明確に区別しているのである。これは、ロンドン動物園に始まる欧米の専門的動物学協会を基礎とする組織運営体制の歴史的な流れが現在まで続いており、自然史博物館としての明確な指向性を示しているからである。

黎明期を娯楽施設としての位置付けに甘んじざるを得なかった日本の動物園が、組織的な欠陥の象徴としてあるのがキュレーター制度であり、キュレーター制度の棚上げが調査研究から種の保存、教育普及に至るまで博物館としての発展を阻害し、世界の潮流に乗り遅れた遠因となったとさえいえよう。

動物学の面だけではなく、経営の専門的な部分でも遙かに充実しており、魅力的なサインやセンシティブなオリジナルグッズを生み出すための専任デザイナーや出版、広報のた

めの編集、撮影などの専任スタッフの配置など日本では考えられない組織体制となっている。

更に運営面では無給の第三者機関である評議委員会が、幾つかの専門運営委員会を従えて園長や管理経営のトップが策定した動物園の政策や施策、事業計画などを審査、討議し、パブリックな意見を直接的、継続的に反映するシステムが導入されており、ガラス張りのマネージメントが基調となっている。

特に、協会運営においては、補助金の有無にかかわらず、政府や行政はパトロニズムに徹し、その関与は排除され、自主独立の組織風土が、柔軟で弾力的な運営方針を可能としている。米国の芸術文化施設の多くが、こうした状況のもとに運営されており、それが世界をリードする要因となっている。

5 一 東へ西へ、環境教育の旗手として

ニューヨークのブロンクス動物園では、二十五人の教育専任スタッフが配置され、一般学校、教師などのための環境教育プログラムを組み、全米や国外にまで東奔西走している。自治体の狭い枠に規制されがちな日本とは違って、ボーダーレスな教育普及活動を展開している。

ブロンクス動物園では、動物生態学と野性生物保護を基本とする教師のための多数のプログラムを構築し、さらには、生物の進化や野性生息地、絶滅しかかっている種の保存などについて構成した中学や高校の教師のための動物園セッションが、周辺の地域の参加者

園内周遊バス



(サンディエゴ動物園)

寄付者名のモニュメント



(サンディエゴ動物園)